

盲乳・幼児のための 育児ノート

厚生省心身障害研究視覚障害児研究班 編
東京都心身障害者福祉センター



社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター

は じ め に

1980年にこの本を作りました。この本を参考にしながら育てたお子さんは、21世紀に成人となります。もし出来れば、成人した日にこの本をお子さんにさしあげて下さい。御両親の愛情のもとで、自分がどのように育てられたかを知り、成人後の社会に生きぬいていく勇気をふるい起こしてくれるものと思います。

このようにいいますと、成人しても目がよく見えないお子さんには、この本は読めないのではないかと疑問をもたれるに違いありません。しかし御安心下さい。目が見えなくても器械に文字を読ませる時代が、もうすぐやってきます（今でもオプタコンという器械を使えば読めますが、完全に実用的とはまだいえません）。

このことから判りますように、世界は福祉社会をめざして急速に進んでいます。いま不自由なこと、将来に不安を感じていることなどは、21世紀にはほとんどなくなっているかも知れません。その将来において、すばらしい活躍が出来ますように、しっかりお子さんを育てていただきたいという願いをこめて、この本を作りました。

どうか、お子さんの成長と合わせて、その時その時に必要な項目を読んで十分に研究し、育児に役立てて下さい。

なお、実際に幼稚園、保育所に、目の見えない子どもを受け入れ、保育を担当した教師の体験報告（「視覚障害児の治療訓練に関する研究報告書」、昭和53年度厚生省心身障害研究より）を付録として収録いたしましたので参考として下さい。

厚生省心身障害研究視覚障害児研究班
東京都心身障害者福祉センター

所長 原 田 政 美

目 次

I 乳 児 期

1. 目の見えない子どもの健やかな成長のために……………	1
(1) 目の見えない赤ちゃんを育てるにあたって……………	1
(2) 目の見えない赤ちゃんの発達の特徴……………	4
2. 「首のすわり」頃までの生活と遊び……………	6
(1) 赤ちゃんとの出会い……………	9
(2) 「首のすわり」頃の赤ちゃんの生活……………	9
3. 「寝返り」「お座り」頃までの生活と遊び……………	12
(1) 「寝返り」を促すために……………	12
(2) 「お座り」を励ますために……………	15
(3) 「お座り」の安定と遊び……………	17
(4) 模倣反復動作と音声……………	19
(5) 自然と社会への接触……………	20
(6) 目 押 し……………	21
(7) 聴覚と手指運動の協応……………	21
(8) 離乳と食事行動……………	23
4. 「伝い歩き」「ハイハイ」頃までの生活と遊び……………	25
(1) 赤ちゃん自身が姿勢を変えるために……………	25
(2) 「伝い歩き」を促すために……………	27
(3) 「ハイハイ」を促すために……………	28
(4) 探索行動と遊び……………	31
(5) 手づかみでの食事行動……………	35
5. 「ひとり歩き」頃までの生活と遊び……………	37
(1) 「ひとり歩き」を促すために……………	40
(2) 戸外歩行……………	40
(3) 歩行のための環境整備……………	42
(4) 「ひとり歩き」と遊び……………	43

(5) 食事、睡眠、排泄のしつけ	46
------------------	----

Ⅱ 年少幼児期

1. 生活習慣行動の形成について	50
(1) 一般的なことがら	50
(2) 食事行動	60
(3) 排泄行動	69
(4) 衣服の着脱行動	73
2. 自立歩行	82
(1) トレーニング（伝い歩き）	82
(2) 音源歩行	85
(3) その他	85
3. 遊びの内容と遊具	86
(1) 一般的なことがら	86
(2) 室内の遊びと遊具	90
(3) 戸外の遊びと遊具	104

Ⅲ 保育所、幼稚園生活と家庭の役割

1. 入所（入園）準備	111
(1) 保育所、幼稚園生活を経験することの意義	111
(2) 目の見えない子どもの、保育所、幼稚園就園の実態	114
(3) 入所（入園）のためのレディネス	118
(4) 保育所、幼稚園の選択と開拓	119
(5) 入所（入園）のための話し合い	122
(6) 入所（入園）前の過ごし方	123
2. 入所（入園）後の諸問題と対応	134
(1) 担任教師や他父兄との関係を円滑にするために	134
(2) 子どもの友だち関係	136

(3) 子どもの発達を援助するための家庭の配慮	140
① 身辺自立（基本的生活習慣）の確立	141
② 家庭生活で経験させたいこと	156
③ 保育所、幼稚園の課題を達成するための援助	158
(4) 専門的な教育	168
 付　　録	 177

I 乳 児 期

1. 目の見えない子どもの健やかな成長のために

(1) 目の見えない赤ちゃんを育てるにあたって

人の一生のなかで、身体の発育と行動の発達が最も著しいのは乳幼児期です。乳幼児期の子どもは、内部機能の発達とそれを基盤にした自然的、社会的環境とのかゝわり合いによって日々発達してゆきます。たゞ乳児期の初めは、外界の刺激に対してきわめて受動的であるため、大人が全面的に手助けを行う必要があり、そうしてはじめて外界に対する反応の仕方を理解してゆくのです。子どもは、そのための適切な機会を与えられれば、自力で発達を遂げてゆくものです。

しかし両親が子どもを育てるうえで、精神的動揺や疲れを感じている場合には、子どもを放置したり、逆に極端に過保護にすることになり、発達上の適切な機会を与えることができません。両親の子どもに対する態度が子どもの成長と発達に大きな影響を与えることになるのです。

わが子が回復不能な障害児であることがわかった初期の段階では、両親は少なからずこのような状況に陥ります。そして、不安、焦燥、失意のあまり、とてもその現実を是認することができず、治療の可能性を求めて幾多の病院を巡歴することになります。その間、子どもに対しては、終始暗く神経質な対応を行い、子どもの発達に必要な適切な働きかけが行われなくなります。目の見えない子どもが、外界の刺激に対してきわめて受動的である乳児期のはじめに、こうした状況におかれた場合には、心身の発達の上で大きな打撃を受けることになることは言うまでもないことです。

目の見えない子どもの育児書としては世界的名著とされている、「Our

「Blind Children」の中で、著者ローエンフェルド博士は「盲幼児は、本質的に一般の子どもと同じ過程で発達する。しかし彼らの学習方法は、一般の子どものそれと同一でないため、発達の速度が緩慢な場面があるが、全体としては重大な遅れをもたらすことはない」と言っています。当センターでは、発足以来の過去10年余の間に500名以上の盲乳幼児指導を行ってきましたが、その経験からも「盲幼児は、適切な養育環境があれば、一般の子どもと同じように発達する」と言うことを断言できます。

以上の点から考えると、両親がまず行うべきことは、最も信頼できる病院を受診して眼疾や視力を正確に知り、その状態に応じて何ができるかを正しく判断することです。少しでも視力があれば、それを最大限活用させるべきですが、乳児期の視力はなかなか正確には診断されないものです。したがって、病院を巡歴するよりもむしろ行動観察上、玩具を追視したり、凝視したり、更には障害物にぶつからずに移動したりする等、“見えている”行動が発見できるか否かが、より正確に視力を判断する材料になります。

全盲の子どもの場合は、視覚に変わり得る他の感覚経路である触覚、聴覚、嗅覚、温度覚などを用いて発達してゆきますが、そのための環境を整え子どもの自発を促すのが、両親とりわけお母さんの役割りと言えます。つまり、目の見える子どもが視覚によって自然に得ている情報を、目の見えない子どもの両親は、事物に積極的に近づいて触らせ、言葉で説明したりしながら理解させるようにします。そのためには、目の見える子どもを育てるとき以上に接触を緊密にし絶えず相手になってやる必要があります。それも「訓練」や「強制」としてではなく親と子が打ち解け合い、楽しい雰囲気で行うべきです。両親が充分愛情をかけてやり、子どもの情緒が安定した時にはじめて積極的に外界の事物を探索し、認知しようとする行動が生まれるのです。

以上の事を基本的留意点とすれば、目の見えない子どもに兄弟が有り、お母さんに育児の経験がある場合には、自信をもって、兄や姉と同じように育てることが重要といえます。しかし、初めてのお子さんが目が見えない場合には、両親の動揺、不安は大きく、とてもお母さん一人で養育を担い切れるものではありません。したがって、まずお父さんが最大の理解者となり協力者となって養育にあたるとともに、親、きょうだい、友人、近隣の人々か

ら、普通児の育児に関する意見を求め、さらに、地域の指導担当機関と連絡を取り、養育上のアドバイスや必要な参考書・遊具などの紹介を受ける、あるいは目の見えない子どもを育てた経験のあるお母さんの体験を聞く機会を作ったり、諸手当やホームヘルパー、ボランティアなどの社会資源を大いに活用するようにしましょう。

育児書や専門家や病院の医師の見解は、うのみにするのではなく、あくまでもお子さんの状態に照らし合せて参考にするものです。およそ子どもは、個性や個人差によって一様ではありませんし、育児のように繁雑でこまごました仕事に関しては、経験とその応用が最も確かです。専門的知識や意見は、ある特定の領域には詳しいが、それによって子どもの養育全体を規定する事はできないからです。また、身体発育や行動発達の良し悪しを、「平均値」や他児と比較するのも意味のないことです。目の見えない子どもにも個性や個人差が顕著であり、一時期のある行動が著しく停滞したり、伸びたりしますので、毎日が生き生きとして健康であることが最も大切なことです。

とかく目の見えない子どもの両親は、周囲の目を気にするあまり、社会的な関わりあいのある場への参加に消極的になり、外出を極端にひかえがちです。しかし、育児は、親と子が四六時中、閉鎖的な室内で向き合って行われるべきものではありません。そうした状態に置かれれば、親も子もフラストレーションを起すのはあたりまえのことです。目の見えない子どもにとっても、戸外の新鮮な空気、柔らかな日差し、様々な物音、周囲の変化など多様な事物の刺激は、室内とは比較にならないなど魅力に富んだものです。同時にお母さんは、戸外で様々な人に接する中で、自分の子どもをよく理解してもらい、他の子どもを知り、育児に関する情報交換を行うなどしつつ、わが子の育児に関する自信を日々深めてゆくことができるでしょう。

以上で明らかなように、目の見えない子どもの健やかな成長のためには、第1に心身の発達に対する適切な配慮、第2に家族の一員として愛情ある働きかけが行われること、第3に自然と社会とのかきわり合いの深い場で養育が行われることが、不可決の条件と言えます。

(2) 目の見えない赤ちゃんの発達の特徴

次に歩き始め頃までの目の見えない子どもの発達の特徴について、その概要をのべてみたいと思います（養育上の留意点に関する詳細は、後の各章でのべることとします）。

ア. 目の見えない子どもの「首のすわり」から「歩き始め」頃までの運動発達は、目の見える子どもと概ね同じ段階をふみますから、基本的には同じ方法で対処してよいといえます。特に内部機能の発達と姿勢（首のすわり、お坐り、一人立ち）の発達は、目の見える子どもと比べて遅れることはありません。しかし、姿勢を変えたり、自発的に身体を動かす運動（寝がえり、起座、ハイハイ、つたい歩き、始歩）などは、適切な働きかけがないと遅れる傾向があります。

イ. 目の見えない子どもが、外界の事物を探索し、その形、大きさ、材質の違いや位置関係を知り、空間を理解するためには、視覚に代って触覚が重要な役割を果たします。しかし、視覚と違って触覚は、範囲が限定される、経験が個別化される、能動的働きかけを必要とするなどの問題があります。赤ちゃんの手指は、ごく早い時期から指しゃぶりをしたり、玩具を握ったりの活動をしていますので、この手指を効果的に使い、視覚に代って自発的な探索行動が、広範囲で多様な事物に及ぶようにさせることが、きわめて重要です。

ウ. 目の見えない子どもの日常生活動作やしつけの習得順序は、目の見える子どもと何ら変わるところがありません。

しかし、目の見える子どもが、親の動作や周囲の状況を視覚的にとらえて模倣し、自然に習得してゆくのに対して、目の見えない子どもには一つひとつ手をとってその動作や方法を教える必要があります。目の見えない子どもの日常生活動作の中には、見えないからできないのではなく、やらせないからできないと言うものが沢山あります。これらは、親がしてしまう方がずっと簡単ですが、手間と時間をかけて教えることが目の見えない子どもの行動

の自発につながるのです。

エ. 目が見えなくとも、聴覚や発語器管に異常がなければ、言葉を聞き話すことにおいて遅れを示すことはないはずです。言葉はコミュニケーションの手段として使われるものですから、子どもの訴えや要求を積極的に行わせ、両親がそれを全面的に受け止めてやる必要があります。もし両親が目が見えない子どもを持ったというショックから、子どもに対して投げやりな態度で接していたり、不憫さのあまり、子どもの訴えや要求をいつも先回りして解決してしまうと、子どもは積極的なコミュニケーションの意欲を失い、言葉のない生活が定着してしまいます。また、目の見えない子どもには、具体的に事物を解わらせたり体験させたりしながら、言葉を理解させることが大切です。目の見えない子どものなかには、事物の意義を理解せず巧みにお喋りしたり、レコードやテレビの音声を真似る例が多々ありますが、これは、言葉ではなく、あくまでも音の模倣に過ぎないのです。

オ. 子どもの情緒面での発達は、およそ1歳ぐらいいまでに、人間としてのひと通りの型を整えると言われています。目の見えない子どもの情緒や社会性は、両親の養育態度が適切であれば、目の見える子どもに劣ることのない発達を期待することができます。そのためには、両親が家庭において充分愛情をかけてやるとともに、社会や自然環境に融け込ませ、家庭や社会の一員として養育することが大切です。

なお、活発な活動と積極的な探索欲求の裏面には、情緒の安定と豊かさが不可欠であることに充分留意してください。

以上で明らかなように、目の見えない子どもといえども、目の見える子どもと同じように育てられ発達の機会さえ与えられれば、その発達に大きな違いがあるわけではありません。しかし、目の見えない子どもは、出産周辺期や乳児期の病院歴の長さや、養育環境上の問題などによって、目の見える子どもと同じような育てられ方をしていないのが通常です。その状態や程度によって、子どもの発達の一時的停滞や個人差も様々です。

したがって、後の各章では、年齢（月齢）によって子どもの発達上の特徴

や養育上の留意点を述べることは適切でないと考え、子どもの具体的な発達状態に即して問題点を整理することになりました。

2. 「首のすわり」頃までの生活と遊び

(1) 赤ちゃんとの出会い

生まれて間もない赤ちゃんは、状態の良し悪し（暑さ、寒さ、空腹感）を、泣いて訴えたり、顔つきやきげんで正確に表現します。お母さんは、そうした赤ちゃんの表情に教えられて、授乳、清潔、睡眠、排泄などの生理的機能を処理してやります。

言うまでもなく、この頃の赤ちゃんは、自分の欲求を実現するためには、全面的に大人の助けを受けなければなりません。赤ちゃんは、お母さんに生理的欲求を満たしてもらい、抱いたり、あやしたり、姿勢をかえてもらいつつ、徐々に自分をめぐる外界を知ってゆくわけです。

目の見えない子どもも、基本的には目の見える子どもと同じように、両親の愛情と身体的欲求への適切な配慮によって、のびのびと成長してゆきます。けれども、前述したように目の見えない子どもの両親は、子どもの目が見えないことを知ったショックから、どうしても自然な愛情をもって接することができなくなったり、あるいは治療の可能性を求めて幾多の病院を巡歴するために、自然な養育環境をつくることができなくなったりします。こうした状況は、少なからず赤ちゃんの成長に悪影響を与えますので、一刻も早く衝撃から立ちなおり、現実をしっかりとみつめて赤ちゃんを育てたいこうとする態度を確立してください。

目の見えない子どもは両親の微笑とか表情などの愛情表現を視覚的に受け止めることができませんから、それに代わるものとして、より密接な言葉掛けと身体接触が必要になります。即ち、目の見えない子どもには、親と子が打ち解け合い、楽しいほのぼのとした関係を作ることが何より大切であり、そのためには、お母さんが赤ちゃんに充分愛情をかけてやり、適切な働きかけを行うことです。子どもが、泣いたり、むずがったりしている時は 親の

働きかけを要求しているものであり、抱きあげてあやしたり声掛けしたりする必要があり、いわゆる抱きぐせなどを警戒すべきではありません。いくら泣いて要求しても放置されていたために、訴えや要求を一切しない子どもに育ってしまう方が、心身の発達に大きなマイナスになるからです。

さて、初めての授乳は誰でも緊張するものですが、あせらずゆったりとした気分で行えば 赤ちゃんの側で、必ず方法を習得してゆきます。目の見えない子どもの授乳には、不意な働きかけで驚かす事のないように、必ず事前に声掛けして赤ちゃんを抱き起しましょう。母乳の場合は、ピッタリとした身体接触で暖かさや安定感を感知させることができますが、人工乳の場合は、微笑に代わる優しい声掛けを不可欠とします。

また、オムツ交換の時にも、必ず事前に声掛けを行い、オムツをはずして機嫌よく体を動かしている時などは、「ノビノビしましょう」などと言いながら、両下肢や両上肢、腹部を軽くマッサージしたりする触刺激を与えましょう。

赤ちゃんは、一般に、授乳や入浴、日光浴、オムツ交換の後などの気分が良い時に、盛んに発声しますので、そんな時、お母さんが音声を真似したり、言葉かけをして、優しく対応してやることが大切です。目の見えない子どもは視覚的に両親の笑顔や表情、行動を把握できませんので、これが一般の子ども以上に必要になります。音声は、はじめ「アアア」「ウーウー」などの母音を中心ですが、やがて、あやすと笑ったり、言葉かけに声を出すなどの反応がかえってくるようになり、初期のコミュニケーションが形成されてゆきます。生まれて間もない乳児の睡眠時間は、概ね20時間以上とされていますが、最近の子どもは、覚醒時間がかなり長いようですので、覚醒時には積極的に相手をしてやる必要があります。

赤ちゃんが、身体を立てゝ抱いても首がふらつなくなり、腹ばいになると、少しの間頭を持ち上げていられる状態になると、首のすわりは未だ完全ではありませんが、身体調節の初歩的行動が形成されてきたといえます。こうした状態になったら、機嫌の良い時に、仰向きから前腕を持ってゆっくり

上体をひき起したり、腹這い姿勢で頭と肩をあげたりする姿勢を積極的にとらせましょう。

また、赤ちゃんは、オムツをはずすと、身体が自由に動かせるので非常に喜びます。そこで、天気の良い時には、日溜りでオムツをはずし、軽快でラフな服装にして、のびのびと体を動かすようにさせます。

このように自由に身体を動かしている時に、手指を口に持ってゆき、指しゃぶりをを行うようになります。手指を自発的に動かして事物に働きかけることは、目の見えない子どもにとっては特に重要なことですが、その第1歩は、このような手と口の協応動作です。赤ちゃんの手指を使ったあそびは、まず最も手近にある自分の身体を弄ぶことからはじまりますので、指しゃぶりを禁止する必要はありません。

また、この頃になると、ガラガラやおしゃぶり等の玩具を手渡すと、暫くの間握っていることができるようになり、やがて、手腕を動かして振ったり、口に運んでなめたりするようになります。しかし赤ちゃんにとっては、イミテーションとしての玩具よりも、実物の方がはるかに魅力に富んだもののようにです。そこで指しゃぶりをを行うようになったら、授乳時には、お母さんの乳や哺乳ビンに手を添えさせ、抱いているお母さんの手・指や顔・衣類に触れさせたりして、実物の感触をわからせることが大切です。玩具を用いる場合には、ただ手渡しておくだけでなく、話しかけたりリズムカルな音を出したりして、玩具を媒介に楽しい親子関係を形成することが大切であるといえます。

初歩的な身体調節行動としては、「首が座る」ことが重要ですが、これは、おゝまかに言えば、座位にしても首があまりぐらつかない、又は前腕を持ってゆっくり引き起した時に、首が体幹に対してまっすぐついてくるような状態をいいます。

この頃になると一般に赤ちゃんには、今までの生理的内部刺激によって引き起こされていた情緒反応とは異なり、人や物などの外界刺激に対する情緒反応が出現し、手、足を屈伸させながら盛んに発声したり、時には声を出して笑うなどの活気溢れる情緒を示すようになります。

R男ちゃん（後水晶体線維増殖症、視力0）は、首が座り、立たせて抱いても上体がぐらつかなるとすぐ、当センターに養育相談のため来所しました。プレイ・ルームでのR男は、ガラガラが手に触れるとそれを握り、口に入れてなめたり、哺乳ビンに手を添え、軽くなると自分で持って飲むなどの手指の使い方をしています。また、お母さんの膝の上でビョンビョンはねたり、腹這いにすると頭と肩を持ち上げたり運動もします。大人があやすとそれに対応して声を出したり、「アー」「ウー」「アーチャ」「エイ」などの発声を盛んに行い、とても活発な様子を示しています。

このR男ちゃんの例は、目が見えない子どもでも、外界刺激を適切に与えれば、見える子どもと同じように活気あふれる反応をすることを示しています。

しかし、目が見えない子どもについては、笑いが少なくとくに大きな声で笑うことがない、あるいは事物への反応が消極的で、親にしがみついたりジッとうずくまっているということがよく指摘されます。これは、初期の親子関係や外界刺激に対する反応のつまずきに起因しているといえます。したがって、この時期の目が見えない子どもには対人的触刺激を豊富に与え、身体を動かし手・指を使って遊ぶことの楽しさを理解させることが大切です。ある全盲の子どものお母さんは、「3ヶ月検診で眼の異常に気がついてから、毎日が不安で気が滅入ってくるので子どもに何かしら働きかけるようにした。子どもがいろいろ反応してくれるのが一番気晴しになった。」と述べています。目が見えない子どもにとって、親子関係の緊密さはいくら強調してもしすぎることはないようです。

(2) 「首のすわり」頃の赤ちゃんの生活

目が見えない子どもの運動能力の発達には、目が見える子どもと同じですが、視覚に代わる触刺激を充分与えないと運動を起そうとする動機が生まれませんので、環境づくりと働きかけが非常に重要になります。そこで、首がすわったら、抱いて立位姿勢をとらせる時間を少しずつ増やしてゆき、身体を揺らしたり、撫でたり、脇の下を支えて「トン・トン・トン」とリズムカルに

声掛けして足の屈伸をさせます。また、寝がえり、ハイハイなどの初期の移動行動に備えて、うつぶせ姿勢をとらせ、前腕で上体を支えるように励まします。

赤ちゃんは、ベットの中で長いガウンやオクルミに包まれている状態では、動く自由を束縛され、生き生きとした活気ある動きがとれません。よくいわれることですが、子どもの保温は、大人より一枚少ないぐらいの着衣でちょうど良いわけですから、厚衣を避け、手足を自由に動かせるようにしておきましょう。日当たりの良い場所では、オムツをはずし下着一枚にして身体をのびのび動かせるとともに、足を自分の手で持たせたり、腹這いにして腕立てをさせたり、膝の上に立たせて下肢を屈伸させたり、膝に座らせて手・指を弄んだりさせます。

これ等の運動は、決められた時間に決められた場所で行う「赤ちゃん体操」のような機械的なものではなく、あくまでも、子どもの機嫌のよい時に、お母さんと子どもの楽しいくつろいだ遊びとして展開されるべきものであり、「訓練」として強制すべきものではありません。

この頃になると、赤ちゃんの発声はさらに活発になり、運動や授乳の時、入浴後または入眼前などのゆったりした気分の時に、大人が言葉かけをするとそれに反応して再び発声する事が確実にになり、声を出して笑ったりします。こうしたコミュニケーションは勿論目の見えない子どもでも成立しますが、目の見える子どもに対するよりも頻繁に、感情を多くこめた話しかけを励行する必要があります。例えば、頬ずりをしたり、額や頬を軽く突ついたり、くすぐったり、更に大人の顔や体をいじらせてやったりする触刺激的あそびや動きかけを行いつつ話しかけると、豊かな感情表出がなされ、初期の言語発達の助けになります。

初期の幼児の発声は意味のある言葉ではないので、親子の会話は一方通行のように思われますが、それだからといって両親が黙っていたのでは言語は発達しません。初めは親の言葉を理解することはできませんが、言葉とその言葉の意味するものを関係づけることを徐々に学んでゆきます。

一方、この頃の赤ちゃんには、「ガラガラ」や「おしゃぶり」などの指先に触れた玩具をつかんで振ったり、両手を握り合せたりからませたり、哺乳

ピンや乳房に自発的に手をかけたりするなど、手指を様々に活動させ、やがて身近にある物に手をのばして取ろうとする動作が出現します。目の見えない子どもに対しても、指先にちょっと触れた程度で玩具をつかむようにさせ、握った玩具を振ったり、いじったり、口に入れたりする経験を与えることが大切です。



吊し玩具

図 1 - 1

やがて、玩具の音を聞かせるとジッと聞き入っている様子を示しますので、この段階では、図1-1のように、ベビーベットなどを利用して手を動かさせば届く範囲に握りやすく良い音のする玩具を吊してやります。はじめは、手指を動かすと、偶然玩具に触れるという状態ですが、そこに常に玩具があることを理解した目の見えない子どもは、意図的に玩具に手をのばし、引っぱ

ったり振ったりして遊ぶようになります。

K男ちゃん（後水晶体線維増殖症、光覚）のお母さんは、K男ちゃんの首がようやく座った頃、センターの指示で、「サークル・ベット」にゴムを張り、ガラガラを数個吊し、腕をのばして触れるようにしたところ、4～5カ月でそれによる遊びが活発になり、ガラガラをつかまえては口にしゃぶり、はなしてはつかまえる、時にはそれを口にくわえたまま持ちかえるなどの遊びを行うようになったと報告しています。

K男ちゃんのような遊びは、やがて、玩具の音を聞いて手をのばすという、手・指動作と聴覚と空間の位置感をむすびつけるような行動に発展します。

以上で明らかなように、お母さんが目の見えない子どもの行動欲求を引き出し、それに見合った環境を設定することで、外界に対する自発性は次第に向上してゆきます。とりわけ目の見えない子どもが、外界刺激を最も確実に

受け止められるのは手指からですので、お母さんの緊密な働きかけで、手・指を使う機会を積極的に与えることが大切です。

この頃になると、目の見えない子どもも、運動や探索などでエネルギーを使いますので、その分食欲を増してきます。一方入浴の後などに果汁や温湯をスプーンから飲む（吸う）といった動作も可能になりますから、離乳の準備に取りかゝることが出来ます。

スプーンの使用は、離乳（流動食→半流動食の摂取）に先行する必要な経験ですが、必ずしもスプーンにこだわらず、「グイのみ」「オチョコ」のような小カップに入れた水分を飲ませてみるのも良いでしょう。始めは半分以上上こぼすような飲み方ですが、次第に「ポチャ、ポチャ」音をたてながら、上手に飲むことができるようになります。

早い子どもは、この頃からペースト状のパンガユ、マッシュユなどを食べられるようになります。ミルクをあまり好まない子どもなどは、早い時期に離乳食にならしたほうがよいようです。下痢や嘔吐がなければ、充分適応しているわけですから、心配せずに離乳食を進めましょう。

首が座ってきたら、赤ちゃんは積極的に外出させましょう。これは、単に身体づくりを目的とした「日光浴」とか「外気浴」のためだけでなく、戸外の多様で変化に富んだ刺激を与えるためにも必要なことです。

目の見えない子どもも、戸外の良い空気を吸い日光を浴びながら、人や動物の声やさまざまな生活音を聞いて、充分楽しむことができます。従って、「抱っこ」してゆくのが無理な場合には「オンブ」や乳母車にのせて、お母さんと一緒に外出することを習慣づけましょう。

3. 「寝返り」「お座り」頃までの生活と遊び

(1) 「寝がえり」を促すために

寝がえりは、手足の筋力をつよめ、次に続く四つ這いハイハイへの前段階行動として重要な意味を持っています。首が座ってくると赤ちゃんは、手足を様々に動かして、仰向き→横向き、仰向き→腹這い、腹這い→仰向きなどの運動を行い、徐々に寝がえりを打つようになりますが、この過程は、目の見

えない子どもの場合でも何ら変わることがありません。そこで、首が座ってきたらベビーベットなどの狭い空間に閉じ込めておく事は止め、畳や床上にできるだけ大きな敷物をしいて寝かせ、軽快でラフな服装にして、手足を自由に動かせるようにしましょう。仰向き→横向きなどの動きがみられたら、腹這い姿勢をとらせ、下敷きになった腕を抜きやすいようにしてやります。目の見えない子どもにとって、腹這い姿勢は決して楽しいものではないので、嫌がる子どもも多いのですが、手足を自由に動かし、体幹を回転させる運動（あそび）として、この頃から行わせる方が抵抗が少ないように思います。仰向き→横向きは、一方の方向だけでなくもう一方も可能なように、体の向きを作ってやります。これらの手助けを経て、子どもは仰向き→腹這い、腹這い→仰向きの連続動作としての寝がえりを徐々に完全なものとしてゆくでしょう。しかし、寝がえりは、かなり長期間にわたって行われる動作であり個人差が顕著でありハイハイが可能となる頃、完成する子どももいます。目の見えない子どもの場合は、寝がえりの開始が遅れ、お座りと同じ時期、もしくは、その後可能となる事がよくあります。これはお座りは、未だ不完全なうちから、大人の膝などに座らせられるのに比して、寝がえりの場合はこれを促すための環境作りが不十分なためと思われます。

〇男ちゃん（視神経乳頭形成不全・全盲）は、仰向き→横向きになることが可能となってから1カ月半ほどすると、仰向き⇄腹這いを一日何十回となく繰り返えし、6畳間の端から端まで移動し、そこにあるタンスの把手を上下させるあそびに熱中するようになりました。これは主に右回転の寝がえりですが、左回転は苦手のようにであり、仰向きからまず横向きまでを容易にし、その後は空中遊泳をするような恰好で懸命に努力しているので、腰のあたりに、ちょっと力を貸してやると腹這いになります。お座りは、3～4分保持していられますが、バランスが崩れても両上肢で支えることは未だできません。しかし、お座りの姿勢を保ちながら、玩具を持ちかえたり両手に持続的に持っていることは可能で、さかんになめまわします。また、ポリ袋を好んで弄ぶので、大人が一方の端を引っばって「オ

ットト」というと、キャッキャッと笑いながら引っぱりかえします。

K子ちゃん（第1次硝子体過形成遺残・光覚）は、お母さんが声掛けすると、両足をバタバタさせて喜びますので、抱き上げると膝の上で足をピョンピョンさせて遊びます。仰向きに寝かせ、お母さんが両足を左手で下からつかみ、右の人差し指を本児の右手に握らせ、力を貸すと反射的に腹這い姿勢になります。1ヶ月ほど経つと、K子ちゃんは左回転による腹這い姿勢を自力でとり、腹這いのまゝ上体を起こす運動を楽しげに行っていますが、未だ、左右とも自由で完全な寝がえりにはなりません。しかし、お座りは、すっかり安定し、両手に玩具を持って振ったりなめたりしています。

次に、腹這い姿勢で腕を立て、頭や体を支えることが充分できるようになったら、両下肢を折り込んで「四つ這い」姿勢をとらせませす。また、赤ちゃんが、膝の上で両下肢を屈伸させる動作をするようになったら、脇の下を支えて、床に足裏が全面接地するように立たせてみましょう。「高い、高い」をした後「トン」と床に着地させるような動作を反復すると、赤ちゃんは、とても喜びます。

さきのK子ちゃんの寝がえりが自由になり、お座りで、玩具を落とすと上体をひねって探すような仕種をするようになった頃、お母さんが両手を差しのべると、人差し指をしっかりと握り、立つ様子を示すので、力をかけてやると、両足膝をピンとのばして足裏全体を床につけて立つことができます。更に、「1・2、1・2」と声掛けするとニコニコして両足屈伸を始めます。また、A子ちゃんは、「ブルーン、ブルーン」と身体を振り廻されたり大きなぬいぐるみの上に腹這いのにせてくすぐったり、あやしたりされると声高に笑って喜びます。

こうした身体を動かす遊びの機会を適宜与えることは、その後の独立歩行に向う運動発達にとって必要なことです。なお、これらの運動は、訓練的に行うものではなく赤ちゃんが機嫌よく身体を動かしている時に、楽しい雰囲気

気で優しい声かけで、その動きを助けてやるものであることはいうまでもありません。

(2) 「お座り」を励ますために

目の見える子どもにとって「座る」という行動は外界刺激を受けとめ、外界に働きかけるための新しい視覚空間の獲得という意味を有するものですが、目の見えない子どもにはそれが不可能なので、放置しておいたのでは、お座りを安定させる意欲を示しません。しかし、目の見えない子どもにとっても仰向けに寝ているよりは、お座り姿勢の方が、その子どもの空間行動は多様で広範囲に及びますので、発達上重要であることはいうまでもありません。

そこで目の見えない子どもも、首が座り、背骨がジャンとしてきたら、お母さんの膝に腰掛けさせたり、腰を支えて座らせるなどして「お座り姿勢」を積極的にとらせるようにしましょう。戸外の散歩の時などは、公園などで、お母さんの膝に座らせて、ゆっくりブランコをこいでやるのもよいでしょう。

「お座り」は、すぐに安定するわけではなく、まだ、バランスが充分とれないうちから大人の膝や寝椅子などに他動的に座られます。その機会にお母さんとのリズム遊びや反復動作（「オツムテンテン」「チョウチ、チョウチ」など）の楽しさを味わったり、玩具を両手に持つ・持ちかえる・自分の手指をからませる・抱いているお母さんの顔をいじる・くすぐったり、ゆさぶったりする等々の触覚的筋運動的刺激を豊富に与えられて、「お座り」の楽しさを知ること、徐々に自立してゆきます。

目の見えない子どもの場合、「お座り」によって外界刺激を受けとめ様々なあそびを創造することの楽しさを経験しないと、機能的には充分お座り姿勢が保てるのに、座らせようとすると拒否して強引に仰向けになったり、真直ぐに突張ってしまうことがあります。お座りを拒否することは手指を使って外界を探索する欲求をも制限することになりますので、お座りを励ますような工夫や配慮はぜひとも必要だと考えます。

M子ちゃん（障害なし）、N男ちゃん（網膜症・全盲）は8ヶ月早産の双子児です。2人は、寝がえりを開始する頃までの運動発達では、ほとんど差がありませんでした。しかしM子ちゃんがお座りを開始し、あたりを見渡しながら玩具を見つけ、それをつかんで振ったり、しゃぶったりする頃には、N男ちゃんのお座りは不完全で前につぶれそうな姿勢になりながら、手渡された玩具をしゃぶるという状態です。お座りは安定しないが玩具をしっかり握ってなめ



図1-2 斜め机

ているので図1-2のように“トッター”と斜め机を配置し、机上にゴムひもを張って玩具を吊してやると、手指の行動範囲がひろがり、嬉しそうに玩具をひっぱったり、放したり、或いは探してつかみ、なめるなどの様子がみられるようになりました。

お座りが未だ充分安定していない目の見えない子どもに対して、今紹介したトッターと斜め机の組み合わせは有効であり、身体を起こした状態で手・指を使って遊ぶ機会を与えるための工夫の一つです。また、不安定ではあるが、1・2分はお座り姿勢を保持できる子どもには図1-3のような改良机も有効です。この机を使えば、机上の玩具が落ちないように工夫し、触りやすい触空間が形成されて玩具を自発的に動かして遊ぶことができます。

また、お座り姿勢が崩れそうになっても、机の縁に支えられるので、お座りが安定する前段の目の見えない子どもたちの遊具として喜ばれます。

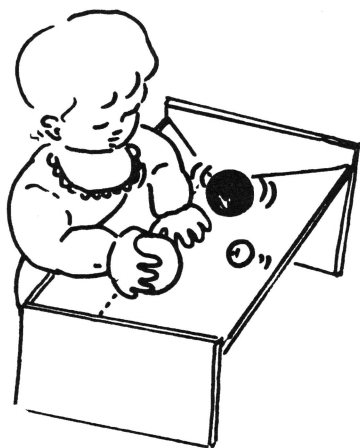


図 1 - 3 改良机

(3) 「お座り」の安定と遊び

目の見えない子どものお座りが安定してきたら玩具を使った種々の遊びが出来るようになります。例えば、図1-4のような小机を用意し、机上にセルロ



図 1 - 4

イドを貼りつけて吸盤付き玩具を固定したり、あるいは机上にゴムを張っていくつかの玩具を結びつけておくなども一つの方法です。

また、叩くと快い音のする玩具を与えて、叩く行動を促すのも良いでしょう。玩具はいつも机の正面位置におくのではなく、左右、前方につらして置くようにします。始めは叩く位置の定位が正確でなく、音に対して手を出す方向

が違ったりしますが、経験を重ねることで徐々に定位が正確になってきます。こうした動作をうながす市販の玩具としては、タイコ、タンバリン、卓上ピアノなどがあります。

ハイハイや伝い歩きなどの移動を行う以前の目の見えない子どもに適した玩具は何か、ということがよく問題になりますが、子どもの行動欲求に見合っ
て図1-2、図1-3、図1-4で示したような工夫や配慮を行えば、一般的な乳児用玩具は何でも活用できます。市販の乳児用玩具にはプラスチックやゴム、ビニール、木製のものなどがありますが、音が出て動きがあり、色彩が明るくて持ちやすいものが良いようです。これ等の主に視覚的興味を持てるようにつくられた玩具が、触覚的興味を引き出せるとは限りませんが、この頃の子どもは、何でもなめまわし、口による触覚的確かめをよく行います。この点は、目の見えない子どもも同様であるし、さらには、玩具そのものの操作よりも、玩具を媒介にした母と子どもの緊密な接触が大切であり、またそれによって、どのようなあそびを作り出せるかがより重要ではないかと思われます。

R男ちゃんは、お座りが安定すると、卓上ピアノを平掌で叩いたり、両手にガラガラを持って振る・机に打ちつける・一つを捨て、もう一つを噛む（生歯下2本）・なめる・持ちかえるなどのあそびに熱中しています。寝返りが自由になり、時には四ッ這い姿勢になって体を前後に揺らしたりします。胸の高さ位のベッドの横棒につかまらせると、1・2分はしっかりとつかまって立っています。お母さんが膝に座らせて、R男ちゃんの口に軽く掌をあてると「アワワワ」の発声をしします。「オツム・テンテン」「おて、ジャンジャン」と言葉掛けをすると、どうやらそれらしき動作をすることができます。また先程までさかんに弄んでいたガラガラを、R男ちゃんの手の届く位置でふって音を出すとお母さんの肩附近から腕にそって手指をのばしそれを取ることに成功しています。

以上のように、R男ちゃんは、ガラガラやオシャブリ類の玩具を様々な活用し、お母さんにお相手されながら活気溢れる遊びをつく

りだしています。

玩具は単に手渡すだけではなく、手の甲に軽く触れて握りかえさせたり、頭・お腹・足・お尻・背中・肩などの身体部位に触れて、そこに手をのびして取らせる、などするのも一つの工夫だと思います。こうして玩具を自発的に握ることができるようになったら、リズムに合わせて打ち合わせるなどを行わせましょう。また、さきのタイコやタンバリン・卓上ピアノなどを素手で充分叩けるようになったら、木琴やタイコなどをうたのリズムに合わせてパチで叩くなど、玩具を媒介にして種々のあそびを成立させることができます。

(4) 模倣反復動作と音声

この頃の子どもには、「ブーブー」「アンマンム」「チャーチャ」など子音と母音が組み合さった発声が多くみられます。泣き声は、怒り・不快・甘えなど、お母さんがその聞きわけができるような「合図」になり、要求がある時は声を出して関心を買おうとし、かまうと注意を獲得するように盛んに発声します。また、名前を呼ぶと反応したり、「いけません」の強い禁止には一時動作を中止したりします。室内でも戸外でもゆったりとした気分の際に膝に座らせて「チョチ・チョチ・アワワ」「オムツテンテン」「オテテンシャンシャン」などの模倣反復動作を繰り返えし教えると、まもなく音声言語との関係で動作を行うようになり、言葉の調子を真似たりします。目の見えない子どもも、こうしたあそびは大好きですが、特に「バイバイ」「チャッチャッ」「パカ、パカ」というような、調子のよいリズムカルな反復音を喜び、お母さんとの相互関係の中で楽しいあそびに興じます。

目の見える子どもの場合、視覚によって、両親や兄姉の動作模倣を行い、事物に対する言語理解を深めてゆきます。これに対して目の見えない子どもには、視覚的模倣の欠如を、親子関係の中で聴覚や触覚を活用して補うことを具体的に教える必要はありません。さきにのべた模倣反復動作はその一つです。その他、室内や戸外で様々な生活音をよく聞かせ、触われるものは触わらせて言葉で説明してやりながら、簡単な擬態音や擬声音を模倣させる事なども大切です。

さきにあげた、双生児のM子ちゃん（障害なし）とN男ちゃん（全盲）の言語発達を比較してみると、全般的に模倣語や有意味語の習得はN男ちゃんが早く、M子ちゃんは、動作での訴えや動作模倣が優位ようです。

U男ちゃん（網膜症、光覚、8カ月早産）は、ようやくお座りが安定した頃、お母さんが手指をとって「オツム・テンテン」「イナイ・イナイ・バー」（本児の顔にガーゼをかぶせ、それを取らせる）「アワワワ」などをやらせると声を出して笑います。また、「ズイズッコロバシ」の歌をうたいながら動作をガイドすると、歌を聞いている様子を示し、歌い終るとニコッとします。何種類かのリズムカルな擬声音を聞かせると、その音の調子にあわせて盛んに発声する様子がみられます。

これらの子どもたちが示すように、目の見えない子どもの初期の言語発達は、適切な言語環境さえ与えられれば、個人差はあるが遅れることはないといえます。

(5) 自然と社会への接触

この時期の子どもは、外出することを非常に喜びますが、これは、子どもが生き生きと成長している事の証明でもあります。見えない子どもの場合でも、「おぶい紐」がかけられると外出することが解かり大喜びする子どもや、公園などで他の子どもの声を聞くと体中で反応して快感を示す子どもがいます。体調を著しくこわしていない限り、晴天の日は2時間程度の外出が必要であり、買物や散歩や公園などで思う存分外気に触れ、良い空気を吸い日光を浴びることは、健康な心身を作るために欠かすことができません。また、お母さんの日常生活におけるいろいろな人や事物との出会いを知り、そこからのさまざまな働きかけを受け止めるようにさせる事も家庭内での人間関係とは異った刺激となります。自然や社会に接することなくして、室内の限られた刺激、親と子の閉鎖的な関係のなかだけでは、たとえどんなにかわいがられていても、子どもが人間らしく育つことはできません。「盲児」だから、

「目が見えない」から、あるいは「不憫」だからといって外出を避けるのではなく、むしろ見えない子どもだからこそ、自然と社会に接する機会を豊富に作ってやる必要があるといえます。

(6) 目 押 し

この時期の目が見えない子どもの場合、手の指や拳で眼部を押す癖（目押し）が出現することがあります。この目押しは、光覚（明暗がわかる）程度の視力の子どものほとんどが行います。なぜこの子どもたちに目押しが出現するのかは説明されていませんが、一つの原因として、手指の運動が一定程度自由になった乳児期における外界刺激や環境の広がりや欠如があげられています。目押しは、子どもが成長して多様な活動に興味を持つようになり、自分の癖を変えようとする自覚が高まると解消してゆきます。しかし、2～3歳になっても手指や身体を使って自発的に外界に働きかけたり、探索操作するような活動に興味を示さず、目押しをしながらうずくまっている子どもがよくありますが目押しは禁止しても決して解消するものではありません。

(7) 聴覚と手指運動の協応

目が見える子どもは、触れた玩具をつかむことができるようになると、目についたものに手をのばしてつかむような行動はすぐ可能となりますが、これは見えない子どもにとっては、音のする玩具に手をのばして取る行動に匹敵します。一般に目が見える子どもが、このような「視覚と手指運動の協応」段階から「聴覚と手指運動の協応」段階までに進むには数ヶ月の期間を必要とすると言われています。

しかし、目が見えない子どもにとって、「聴覚と手指運動の協応」は、自発的な操作活動を行うための初期行動としてきわめて有意義ですから、子どもがお座りをして玩具を弄ぶことに興味を示すようになったら、意図的な環境づくりを行い、目が見える子どもよりも早期に「聴覚と手指運動の協応」動作が可能となるように働きかける必要があります。前にのべた「サークル、ベット」に玩具を吊すことには、そのための準備行動を促す意味もあります。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

盲乳・幼児のための 育児ノート

1981年 5月20日 発行

2001年 5月31日 第2刷

2008年 4月1日 第3刷

定 価 本体 1,100円+税 (送料別)

編集者 厚生省心身障害研究視覚障害児研究班

原 田 政 美

発行者 高橋 実

発行所 社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター

〒167-0043 東京都杉並区上荻2-37-10 Keiビル

電 話 03-5310-5051

F A X 03-5310-5053

振替口座 00110-4-576094

印刷所 コロニー印刷

〒165-0023 東京都中野区江原町2-6-7

電 話 03-3953-3541

本書は、昭和54年度厚生省心身障害研究費補助金の国庫補助を受けて、同研究「視覚障害者研究班」主任研究者、東京都心身障害者福祉センター所長・原田政美氏が中心となって作成したものであるが、同氏のご厚意を得て、このたび当センターが増版したものである。

